



TITLE:

あとがき

AUTHOR(S):

---

CITATION:

あとがき. 東南アジア研究 1965, 3(1): 176-176

ISSUE DATE:

1965-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55036>

RIGHT:

## あ と が き

「東南アジア研究」第3巻第1号（通巻9号）を送ります。創刊以来3年目を迎え、装いも新たに第3巻のスタートを切った。こゝに到るまでには、第2年度のなみなみならぬ努力があったことはいうまでもないが、東南アジア研究センターの研究計画の着実な実現、それにとまなう出版計画の機能的分化におうところが多い。それは正に当センターの活躍ぶりを如実に示すものにはかならず、官制化が実現したこの期にあたって誠に喜ばしい事柄である。

本号では相良、佐藤、口羽、坪内、前田、安芸、寺松、前川、西占、戸田、園部、東中、矢野の諸氏から寄稿をうけ、岩村所長のアメリカでの活躍を記した報告を加えた。多数の方々の御協力を得たために、ページ数もかなりふえ、おあついものになった。内容も当センターの研究活動を反映して教育、心理、人類、地質、病理、法律、測地などの多岐にわたり、現地調査を基礎とする原稿が主となっている。なお体裁の上で特記すべきことは、本号の論文にはすべて英文の要旨を添えていただいたことである。その他西占、戸田の両氏と矢野氏からは英文の寄稿を受けた。現地通信には高村氏がフィリピンの国際稲作研究所から、三谷氏がタイ国北部の山地から、桂氏はチェラーロンコーン大学からそれぞれ興味ある通信を寄せられた。この欄は好評を得ているので今後も続ける予定である。図書紹介はともすると不足がちになりやすいので、活潑な投稿を待ち望むしだいである。

今後の編集については、現地調査を基礎にして、各分野ともさらに深い分析を加えたより学術的なものに発展させていきたい。その場合、他の国、他の地域をも見おとしてはならず、できうるかぎり広い視野になって比較することも必要であろう。また現実の課題から逃避することなく、東南アジアの近代化と平和に一層寄与するような雑誌として育てたいものである。

最後に、岡正雄氏からは貴重な原稿をいただいたにもかゝらず、締切期限を過ぎていたために、やむなく次号に廻っていただくことになった。ここに、お詫びを申しあげるしだいである。

いつもの事ながら、中西印刷には種々無理な注文をさせてもらった。中西亮氏をはじめ同社の御協力にたいしてお礼申し上げたい。本号の編集業務は前半を坪内、後半を水野が担当した。官制化の繁雑な時期にあつて、しかも、きわめて少人数の作業なので、見ぐるしい点、読みにくい点、不統一の点ができたことかと思うが、どうかお許し願いたい。

（編集担当：水野浩一記）

執 筆 者 紹 介			
相 良 惟 一	京大・教育学部・教授	西 占 貢	京大・医学部・教授
佐 藤 幸 治	京大・教育学部・教授	戸 田 円 二 郎	アジア救ライ協会・医務部長
口 羽 益 生	竜大・文学部・助教授	園 部 逸 夫	京大・法学部・助教授
坪 内 良 博	京大・東南ア研・研修員	東 中 秀 雄	京大・教養部・教授
前 田 成 文	京大・文学部・大学院	岩 村 忍	京大・東南ア研・所長
安 芸 岐 一	資源科学研究所・理事長、 東大・名誉教授	矢 野 暢	京大・東南ア研・研修員
瀧 本 清	京大・工学部・教授	高 村 泰 雄	京大・農学部・大学院学生
寺 松 孝	京大・結核研究所・助教授	三 谷 恭 之	京大・文学部・大学院学生
前 川 暢 夫	京大・結核研究所・助教授	桂 満 希 郎	京大・文学部・大学院学生